

山形大学広報誌

みどり樹

Midori  gi
Yamagata University Quarterly Magazine



特集 山形大学の新たな挑戦、8市町村まるごとキャンパス!
最上に大学がやって来た!

vol.24
Summer 2005

山形大学の新たな挑戦、8市町村まるごとキャンパス!

最上に大学が やって来た!



最上に大学が
やってきた。



「超多忙な日々と引き替えに得た、素晴らしい出会いと体験」

その日、新庄のまちはかつて経験したことのない熱気につつまれていました。この地に初めて『大学祭』がやって来たのです。山形県4地区の中で唯一、大学キャンパスのなかった最上エリアにおいてはまさに初見参。この4月に誕生した「山形大学エリアキャンパスもがみ」のお披露目となった大学祭は、5月21日・22日の両日開催され、最上地区8市町村からたくさんの人々が訪れました。学長とのふれあいコーナーや地元の子供たちのダンス、大学サークルの研究発表などなど、さまざまなカタチで山形大学と最上地区の人々が交流を深めた2日間。今回の特集では、その様子をお伝えするとともに「山形大学エリアキャンパスもがみ、って何？」という疑問にお答えします。



新庄市民プラザ

昨年度から国立大学は「国立大学法人」となり、各大学では特色のある大学づくりを目指してさまざまな取り組みを始めています。山形大学においても「自然と人間の共生」をテーマに独創的な大学づくりに向けて動き出しました。その一環として誕生したのが「山形大学エリアキャンパスもがみ」です。

きっかけは中堅事務職員研修「山形大学活性化プロジェクト」。仙道学長が提唱する「ボトムアップに基づいたトップダウン」の試みの一つとしてスタートした職員研修（staff development=SD）システムの第2回のスローガンが「地域へ飛び出してみよう」。8つのチームに分かれて、山形県内の市町村役場に直接出向き、地元の人たちと交渉しながらプロジェクトを創り上げていくことになりました。その中の1つのチームが、最上8市町村に高等教育機関が存在しないという現状に着目し、「県内移動オープンキャンパス・一日山形大学」というプロジェクトを立ち上げたのです。最上地区の中核地である新庄市と何度かコンタクトをとるうちに、最上8市町村がかねてより高等教育機能の誘致を熱望していたことが明らかとなり2つの思いが1つになって、研修における1プロジェクトが山形大学と地域を挙げての一大プロジェクトと化して急展開を遂げたのでした。

全国でも初の取り組み、 高まる注目と期待。

「山形大学エリアキャンパスもがみ」といっても、新たに建物や施設ができたわけではありません。豊かな自然を誇る最上8市町村全体が、自然との共生を掲げる山形大学にとって格好のキャンパスとなり得ると考えたのです。最上地域およそ1800km²がまるごとキャンパスということは、日本一、いいえ世界一のスケールと言えるのではないのでしょうか。

今年3月22日に最上広域圏8市町村と山形大学との間で連携に関する協定書が取り交わされ、4月5日には新庄市の最上広域教育研究センター内に最上事務局が開設されました。今回の「やって来ました大学祭」を皮切りに、「大蔵村自然塾」の開講、戸沢村での「学社融合共育プログラムへの教員と学生の

参画」などが具体的に決まっているほか、大学と自治体サイドが同人数を選出して発足させた運営委員会により今後の展開を検討していくことになっています。

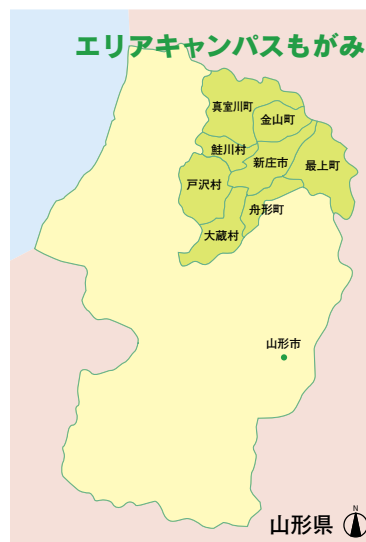
学舎、キャンパスありきの発想から離れて、エリア全体がキャンパスといった取り組みは全国的にみても初めてということで、他の大学はもとより各自治体等、さまざまな方面で注目を集めているようです。「山形大学エリアキャンパスもがみ」が成果を上げることによって、こうした流れが大きくなるとなると、大学がより地域に開かれた存在となっていくことが期待されます。そういった意味でも意義深い「山形大学エリアキャンパスもがみ」はいまスタートしたばかり。前途には、さまざまな課題と可能性が山積みです。今後の山形大学から、そしてエリアキャンパスもがみから目が離せません。



キャンパス長の鬼武副学長



高橋新庄市長



「やって来ました大学祭」



地元パワーと大学の魅力が融合した2日間。

風薫る5月、山形大学エリアキャンパスもがみ開設記念事業として新庄市民プラザを会場に「移動式オープンキャンパス～やってきました大学祭!」が開催されました。オープニングセレモニーは、新庄駅ゆめりあ前から市民プラザ前までのパレードでスタート。高橋新庄市長、仙道学長、鬼武キャンパス長の3名を先頭に、日新小学校の鼓笛隊が駅前通りをパレードし、沿道につめかけた人々にこれから市民プラザで始まる楽しい大学祭を存分にアピールしました。大学祭という新鮮な響きに地域の人々の関心も高く、会場には子供からお年寄りまで大勢の方々が集まりました。大ホールが満席になるほどの盛況の中、地元の表現あそびサークル「ちゃれんこ」のクールなダンスでセレモニーが始まり、学長、市長、キャンパス長がそれぞれの立場から喜びや感動、これからへの期待などを込めたあいさつを行いオープニングセレモニーを締めくくりました。

そしていよいよ、山形大学の教職員と

山大学生約200名の参加による大学祭の始まりです。アカデミックゾーン、サークル発表ゾーン、交流ゾーンに分かれて各会場でさまざまな催しやセミナー、講演会、情報提供、展示などが行われ、訪れた人々は思い思いに「大学祭」を満喫していたよう

です。なかでも人々の関心が高かったのは、山形大学サイエンスワールド「南極の石と氷にさわってみよう」のコーナーで、子どもたちが目をキラキラさせて何億年も前の石や氷に見入っていた様子が印象的でした。また、交流ゾーンの「1日学長室」では、たくさん子どもたちに囲まれてさすがの学長もタジタジといったシーンも。そこで配られた学長の似顔絵&サイン入り「がくちょうせんべい」も大人気でした。その頃、サークル発表ゾーンとなった大ホールと市民ホールでは、山形大学のさまざまなサークル仲間たちが大活躍。大ホールではダンス、アカペラ、花笠踊りのサークルが次々にステージを飾り、それぞれに個性的なパフォーマンスで観客を魅了していました。そして、市民ホールにはボール・スティックや中国ごまの演技が見物のジャグリング部やテレビ番組にも出演するお笑いサークル、いま人気の奇術愛好会が登場。日頃の練習の成果を大勢の観客の前で披露できて学生たちもとても満足げでした。

一方、アカデミックゾーンでは、南極体験を中心としたサイエンスセミナーやおも

しろ科学実験室、異文化交流講演会などが行われました。一見難しそうですが、それらをとても分かりやすく興味深く演出することで将来の山大学生のタマゴである子どもたちを始め地域の人々に大学で学ぶことの楽しさをアピールできたのではないのでしょうか。そして、2日目のメインイベントとなった「山形大学OB記念講演・地球のステージ」では、NPO法人「地球のステージ」代表理事の桑山紀彦先生（山形大学医学部卒業）による演奏と歌とトークのライブに大いに盛り上がり、そのステージから発せられたメッセージに胸を揺さぶられたりもしました。

さまざまな人々がそれぞれの思いで楽しみ、記憶に刻んだ大学祭。山形大学と最上地区の人々をグンと近づけたことは間違いのないようです。



「山形大学エリアキャンパスもがみ」スタートに寄せて。

国立大学法人 山形大学長
仙道 富士郎

2日間「やってきました大学祭」に参加しまして、最上地区のみなさんのパワーと山形大学を歓迎してくださる気持ちに改めて感動しました。その熱い思いにお応えするためにも大学側としては地道に一つ一つ実績を積み上げていかねばと痛感しているところです。

山形大学も法人化に伴って、地域との連携をより強固にしていかななくてはと模索しておりました。そこに、若い教職員の方々からの提案に端

を発し、最上地区8市町村のみなさんの熱意と相まって「山形大学エリアキャンパスもがみ」というカタチで大きな第一歩を踏み出したわけです。地区全体をキャンパスに見立てるとするのは全国でも初めての試みということで注目率も高いので、ぜひ成功させて、いいモデルケースになればと期待しています。地域貢献という言葉には、少し高いところから手を差しのべるといったイメージがあるので、そうではなく本当に地域と一体となって同じ視点で何かを築き上げていく、「山形大学エリアキャンパスもがみ」が地域との関係性においてそのように成長していくことを願っています。

山形大学エリアキャンパスもがみ最上事務局長
樋口 勝也

「最上地区に高等教育機関を」というのは平成2年から訴え続けた悲願でした。当初は、建物を含めて考えておりましたので、なかなか実現には至りませんでした。ところが、今回、地域全体をキャンパスに見立てて中身だけを誘致するという斬新な発想によって「山形大学エリアキャン

パスもがみ」がトントン拍子に実現の運びとなったわけです。仙道学長からは、大学が唱える「自然との共生」とい

う点において自然豊かな最上地区は最高のキャンパスといったお言葉をいただき、また、オープニングセレモニーでダンスを披露してくれた「ちゃれんこ」をみてもらってもわかるように最上の秘めたるパワーにも着目していただいて大変有り難く思っております。「山形大学エリアキャンパスもがみ」というネーミングも大変インパクトがあって“なるほどなあ”と感心しておりました。これを機に、山形大学の学生さんをはじめ皆さんに最上地区にお越しいただくことで、最上地区の教育面の充実とともに地域の活性化にも大いにプラスになるものと期待しております。



エリアキャンパスもがみ運営委員
高橋 欣也

私は、PTAと商店主という2つの立場で「山形大学エリアキャンパスもがみ」を歓迎しています。私が大学に最も期待する点は、人と人とのコラボレーションというところにあります。最上地区に大学機能がやってきたことで、大学生と農業従事者との新たな接点や大学教授と商店主などの交流等、いわばまったくこれまでは無縁だった関わりが新たに構築されていくような気がいたします。たとえば、将来先生になりたいという学生さんと保護者の交流の場を設け、先生になる前の時点で保護者の思いや考え方を知っておくことでより質の高い教師を世に送り出せるのでは、などとも考えております。山形大学と最上地区とが互いのメリットを大いに活用し合うことで無限の広がりをみせるのです。

また、この運営委員会が大学と地域から同人数ずつ出て組織されているという点でも今後に期待がもてます。学校側と地域の意向を互いに尊重し合い、同じ目線で何が必要なのか、本気で取り組む第一歩になれば幸いです。いまスタートしたばかりの「山形大学エリアキャンパスもがみ」の一年後、二年後、そして将来がとても楽しみです。

エリアキャンパスもがみホームページアドレス

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/>



人文学部

YAMADAI

ブリヤート国立大学東洋学部学生を迎えて



日本伝統文化「福笑い」の前で記念写真をとる両学部生

人文学部では、平成17年3月18日から4月1日まで、国際交流締結校であるロシア連邦ブリヤート国立大学東洋学部学部生11名を迎えて短期研修を実施しました。平成15年8月に教員4名と学生10名がブリヤート大学を訪問し、バイカル湖畔で行った交流サマーキャンプがきっかけで実現したものです。

ブリヤート大学生は全員女性で、短期研修の実施は初めての取り組みです。宿泊所は、教育学部の好意により、附属養護学校の施設「つくしの家」を借りることができました。研修プログラムは国際交流委員会を中心に、国際交流学生実行

委員会、総務係により作られました。

いよいよ、ブリヤート大学生を迎えて、実行です。日本語についての講義と茶道などの実技、高島町 南陽市での実習、東京都内研修、山形市長・学長表敬訪問、国際交流シンポジウム、ホームステイなどの多彩な交流企画。

ブリヤート大学生は帰国後、また山形に戻りたいと口々に言っていたそうです。ブリヤート国立大学東洋学部長からもお礼状をいただきました。

私たちも、異文化との出会いによる戸惑いもありましたが、日本と山形を省みるいい機会を得ました。

地域教育文化学部

地域教育文化学部がスタート



金管アンサンブルの記念演奏

これまでの教育学部が生まれ変わり、本年4月から地域教育文化学部がスタートしました。地域教育文化学部は、地域教育学科、文化創造学科、生活総合学科の3学科で構成されています。地域教育文化学部は、地域における教育、芸術、スポーツ、国際交流や生活に関わる領域を広く「地域文化」ととらえ、新しい時代感覚と認識の下で、地域社会の文化の向上に実践的に貢献する人材を養成する学部です。新

学部では、これまでの教育学部で取得可能であったすべての教員免許を取得するためのカリキュラムが準備されており、地域の教員需要に応えることができるようになっています。新学部では、食環境や住・環境全般に関わる科学を学ぶコースなどが、新たに設置されました。これらのコースでは栄養士、栄養教諭などの資格取得を目指すことが可能です。

理学部

自然科学は面白いー理学部の地域連携活動



親子で化学実験 携帯カイロの材料で作った電池でプロペラが回った瞬間

数学嫌いや理科離れといった生徒・児童の自然科学にたいする興味や関心の低下が懸念されるなか、理学部ではさまざまなイベントを行って、自然科学の面白さや学術的意義を伝えようとしています。物質生命化学科は、4月3日に小学生と保護者を対象とした体験実験教室「親子で化学実験・化学反応はエネルギー」を開催しました。親子12組が、鶴浦啓助教授、栗山恭直助教授の指導で、「振ると色が変わる不

思議なボトル」・「携帯カイロを作ろう」・「ELポップアート」など、多彩な実験を体験しました。また、数理科学科では、広く一般を対象として「数学エッセイ・コンテスト」を開催中です。数学に関するエッセイを募集しており（締め切りは8月31日）、最優秀賞には奨励金10万円が授与されます。この事業は山形大学名誉教授内田伏一氏が寄付された奨学寄付金によって運営されています。



YAMADAI

医学部

地域医療への新しい試み



山形大学医学部の重要な使命の一つは「地域医療の充実」です。特に、人口10万人当たりの医師数が193.0人（全国平均206.1人）と全国31位の本県（平成14年末）にあつては、知識と技術を兼ね備えた医師の地域医療機関への供給源としての役割は大です。医学部は、これまでも山形県、医師会等と協力して、全国に先駆けて「蔵王協議会」を設け、卒後臨床研修等を進めてきました。また、平成16年度からは、

文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に参画して、生涯教育セミナー等（写真参照）を行っています。今後は、①地域医療に従事している医療従事者から要望が強い、大学で専門の技術を習得し、多くの症例を経験するシステム、②大学に勤務する者が地域で全人的医療を学ぶシステムの構築に向けて努力しています。

工学部

大学院 理工学研究科に「ものづくり技術経営学専攻」を開設



「地域経営モデル特論」の講義風景

本年4月に大学院理工学研究科（工学系）博士前期課程に8番目の専攻として「ものづくり技術経営学専攻（MOT）」を開設いたしました。

本専攻は、地域経済の基盤となる「ものづくり企業」や「起業」を担う「技術と経営がわかる」マネジメント人材の育成を目的としています。具体的には、「価値創造」「経営管理」などの講義・演習や企業トップを招いての実践的講義、企業現場での演習、各企業の課題を

テーマとした卒業研究など企業の第一線ですぐに成果を生かす「実践力」の養成を行うカリキュラムとなっています。

また、第1期生14名中10名が社会人であるように、社会人学生を主な対象としていることから、講義時間を平日夜間と土曜日午後を設定し、講義ビデオを活用するなど、社会人が勤務と並行して無理なく勉学できる社会人大学院となっています。

農学部

山大演習林における「自然と人間の共生」の実践



学生達による焼き畑の様子

演習林では、森林の伐採跡地を焼き畑にして庄内地方の伝統的な在来作物である温海カブの栽培と、森林からの湧き水を利用したワサビの栽培を試みています。森林内に作物を栽培する農法は木場作（こばさく）と呼ばれ、かつて我が国の山村において普遍的に行われていましたが、現在ではすっかり影を潜め、わずかに山形と九州の一部の地方にみられるのみとなり、それも後継者がいなく消滅の危機にあります。

演習林では、林業と農業を共生させ、土地を有効に利用することで生態系の循環をスムーズにする木場作（agro-forestry）を、自然と人間の共生に貢献できるシステムであると考えております。こうした伝統的な農業技術を継承することは地域の重要な課題であると位置づけ、本学の理念である「自然と人間の共生」を実践する教育・研究フィールドとして大いに活用しています。

研究室
訪問

安藤 豊 農学部教授 角田 憲一 農学部助教授

近い将来、世界的な食糧不足が懸念される昨今、農業の果たす役割は大きい。そんな中、農業の生産性と環境保全を両輪として土壌という観点から研究・教育を行っているのが「栽培土壌学研究室」である。



師弟関係にあった二人が指導する
ほのぼのの研究室発！
21世紀型農業が地球を救う。

鶴岡市にある農学部の「栽培土壌学研究室」を訪ねたのは5月末。田植えが終わって間もない頃で、水田の緑が初々しく輝いていた。研究室のドン、安藤教授はとても気さくで大らか、学生の間でも楽しい先生として人気が高い。海外渡航が大好きということもあって、稲作に不向きな泥炭地などでも栽培が可能なサゴヤシを研究テーマとしており、現地指導などを通して国際貢献すべく東南アジアを中心に世界を飛び回っている。その安藤

教授のよきパートナーであり、学生たちに対しては厳しい先生を演じて研究室としてのバランスを保っているのが角田助教授。かつて安藤教授の教え子だった角田先生は、修士課程を経て一度は大手企業に就職したものの、研究への思いが募り、2年後に大学に戻ってきたのだ。

「栽培土壌学」は、生物生産学科の生産生態制御学講座の一つの研究領域であり、生産生態制御講座自体、今後の農業に必要な不可欠な環境保全型の農業技術体系を





サゴヤシの調査

創造しようと1998年の学科改組で新たに創られた比較的新しい分野と言える。主要な研究領域としては、栽培土壌学、農地物理学、水環境科学、農耕地生態学、生産機械学、生物系廃棄物利用工学、植物病理学、動物生態学など多岐にわたっている。その一つである「栽培土壌学」とは、作物生育と土壌の理化学的性質の関係を明らかにするための研究であり、いかに環境保全を図りながら生産性の高い農業を持続させられるかを探究している。よく田園地帯を自然豊かな心と風景などと形容するが、実は、稲作は土壌に少なからず負荷をかけているのだという。高い生産性を維持させるために耕地生態系の窒素およびケイ酸を理化学的に管理する技術の構築に取り組んでいる。現在、この研究室の学生は中国人留学生を含む17名。自主性を重んじる研究室気質ということで「指示を待っているような学生はお断り」という説明会でのアナウンスが効いたのか、かなりヤル気と積極性に富んだ学生が集まった。安藤先生の指向もあって海外調査などのチャンスが多いという点もこの研究室の大きなアピールポイントとなっているようだ。

「はえぬき」の食味向上に貢献

自然が相手の農業がテーマだけに、教授・助教授といえども研究室にじっと閉じこもって研究に没頭するというわけにはいかない。安藤教授自らが附属農場の水田に率先して出向いて農作業を行うという。さまざまな品種を植え分けなければ

ならないため田植えはすべて手植え。今どきの農家の人以上に大変な農作業をしているのかもしれない。さらに、土壌や気候条件等に左右される稲作は一概には結論づけられないため、近隣8カ所の農家の協力を得てより多くのデータを収集し調査研究の精度を高めている。

一口に農学部といってもその領域は多岐にわたり、さらに奥が深いことはわかった。が、栽培土壌学？窒素？ケイ酸？一般人にとっては何とも馴染みの薄い言葉が次々に飛び出し、研究内容を把握するのはなかなか難しいようだ。すると、安藤教授が最も分かりやすい研究成果の一つとして、県産米はえぬきの食味向上に一役買ったという実にわかりやすい話をしてくれた。はえぬきと言えば、山形県の主力品種であり、「食味ランキング」で特Aという最高の評価を受けているおいしいお米。米の食味を左右するのはタンパク質含有量。玄米タンパク質含有率7%以下に抑えるのがポイントということで、水稻の成長段階に合わせた水田土壌づくりを解明、検証することで食味向上に貢献したのだ。

地球温暖化や世界的な食糧不足など、人類が抱えるさまざまな問題との関わりが最も深い農業。「栽培土壌学研究室」のみなさんに寄せられる期待は大きい。



泥炭に咲くバナナの花



田周辺にココヤシが植えられる



インドネシアとのサゴヤシ共同研究



学業 の 成 果

富士ゼロックス株式会社
研究本部先端デバイス研究所勤務
堀場幸治
大学院理工学研究科修了
(平成16年3月)



あの頃があるから今がある。
専攻分野で頑張っています。

堀場さんは、「富士ゼロックス株式会社研究本部先端デバイス研究所」に勤務する25歳。昨年の3月に大学院理工学研究科（大場研究室）を卒業し、入社二年目の現在、仕事に慣れてきた分ハードルも上がってますます忙しい日々を送っているという。愛知県出身の堀場さんが山形大学に進学した理由はいくつかあるが、いちばんのポイントは一緒に受験した仲の良い友人が全員合格したこと。当時、山形大学工学部の学生の2割程度が愛知県出身者だったらしいというからちょっと意外だ。

山形市内で1年、あとの5年間で米沢市内で過ごした堀場さんの思い出として鮮烈に残っているのが、米沢の豪雪と大家さんから受けた親切と置賜弁講座

（？）だとか。4年生に上がる前の研究室選びは、将来の目標がまだ決まっていなかったのでかなり迷ったという。好きでも嫌いでもなく、ただ一番得意という無難な理由で選んだ有機化学の大場研究室。それが結果的には最善の選択だった。とても明るい雰囲気の研究室で楽しい学生生活を過ごすことができたし、有機合成に必要な経験を積むことができ今の仕事に大いに役立っているからだ。特に、修士論文における研究では、苦難に耐えて模索することでブレイクスルーでき、局面を打破する喜びを学んだ。日々、難易度の高い研究に挑戦中の今、有機合成化学が楽しく感じられるという堀場さんの今後の活躍に期待したい。



成

山形大学で学んだこと、過ごした日々、それらはさまざまな成果となって山形の歩みに燦々と火を灯し続けています。現役の学生やOBたちの活躍する姿を通して、そこに花開いた成果のかずかずには拍手を送り、新たな成果への糧とするものです。



活動の成果

タキタロウボランティアサークル

代表 相原亮太郎
(農学部生物環境学科3年)



相原亮太郎さんが代表を務める「タキタロウボランティアサークル」は、7年ほど前に誕生したサークル。大学の地区調査から朝日村との親交が深まり、村の一大イベントである「タキタロウまつり」のお手伝いをするうちにボランティアサークルへと発展していったのだという。サークル名にタキタロウを冠しているからといって大鳥池だけが活動の場ではない。庄内一円、いろんな地域から大学生パワーが必要との要請があれば、検討した上で参加可能なメンバーを送り込む。地域の役に立てて、自分たちも楽しめるとあって、メンバーは皆イキイキと活動しているようだ。

現在、メンバーは約30名。女子大生も多く今年

地域に役立ち、自分たちも成長。
みんなの笑顔が収穫です。

の新入生の加入状況も順調だ。各種イベントにボランティアとして参加することで普通では経験できないことを体験できたりもする。地域の人々といっしょに何かを成し遂げた時の達成感は、学業とはまた違った糧となって個々人を成長させてくれるようだ。これから取り組んでいきたいことのひとつとして、「同じ庄内地区にある東北公益文科大学の学生ボランティアとの交流」を挙げた相原さん。同じ大学生という立場で地域ボランティアの在り方などについて情報交換することで、また新たな展開なども大いに期待できそうだ。



果

山形大学のキャンパスのある街を訪ねる「シリーズ街角」の第一回は、新庄市を中心とする最上地区。地域全体がキャンパスという新発想のもと、大学との関わりがますます深まるこのエリアの風景をつれづれにピンナップしてみました。

これから、
もっと親しくなる風景。

最上地区



旧羽州街道から望む見事な鳥海山、母なる川最上川、素朴な温泉郷、杉の美林…最上地区には豊かな自然がイキイキとした表情で息づいている。こんなにも自然環境に恵まれたこの地に、いまだ大学のキャンパスがなかったとはなんとももったいない。だが、この春の「山形大学エリアキャンパスもがみ」の開設を機に、エリア全体をキャンパスとしてそれらの恩恵を存分に享受できるようになったのだ。ただ、キャンパスがなかった今までも山形大学とこの地区には深い関わりがあった。仲を取り持ったのは雪。県内でも有数の豪雪地帯である新庄市には「防災科学研究所」があり、自然の雪に近い結晶形の雪を降らすことのできる装置を備えた雪氷防災実験棟は、農学部や工学部のさまざ

まな実験にも利用されてきた。当然、教授陣をはじめ学生たちもこの地を訪れる機会は少なくはなかった。また、山形大学の先生を招聘しての講演会や講習会を開催するなど、大学との交流にかなり積極的な地域だったとも言える。山形大学が掲げる「自然と人間の共生」をどこよりも実践学習できる広大なキャンパスとして、最上地区は山形大学との関わりをより深めていくことだろう。エリアキャンパスの事務局となっている最上広域教育研究センターを中心に、この境界は大学生たちが闊歩する活気あふれる風景へと進化していくに違いない。

この街
いちおしの
味



【くじら餅】

白糖、みそ味、しょうゆ味…
素朴な味わいでお土産にお茶
請けに人気の餅菓子です。
漢字で書くと久しく持ちが良い「久
持良餅」。

中国広西師範大学での「異文化間コミュニケーション実習」の実施

人文学部は、平成16年5月に中国広西師範大学との間で交流協定を締結しました。最初の交流事業として学部共通科目「異文化間コミュニケーション実習」(2単位)を開設し、この3月広西師範大学に8名の学生を派遣しました。

広西師範大学は、広西壮族自治区の桂林市に所在する自治区有数の総合大学です。

中文系、美術系など1932年創立当初

からの学部のほか、外国語学院、教育学院などの文系学部と、物理、化学などの理系学部があります。

今回、同大国際交流処との綿密な連携のもと、8名の学生は、人文学部教員2名とともに学内の留学生宿舍に2月28日から3月11日までの12日間滞在し、研修を受けました。開講式の後、早速実用的な会話の授業を受け、それを実地に応用してみることや、自治区の少数民族、中国

書法についての講義、太極拳の実習など、盛りだくさんなプログラムを受講しました。もちろん、桂林近郊の「天下に甲たる山水」の景観も存分に楽しみました。

また、外国語学院日本語専攻生をはじめとする在学学生や他国の留学生との間で、活発な交流を行うことができました。昼はお互いの得意料理を作って楽しみ、夜は暖かな桂林市街にくり出し、大いに親交を深めたようです。



熱烈歓迎—広西師範大学西正門にて



日本語科学生と食事を楽しんだ後で

YAMADAI NEWS

念願の夢かない小白川地区課外活動サークル棟が完成



新サークル棟

旧サークル棟は、昭和25年に建築された木造2階建(延べ564㎡)の文理学部合併教室で、2階の一部が階段教室になっていました。160人が収容できる教室で、蛭カラススタイルの学生が向学心に燃えた教室でありましたが、築後55年を経過し危険な建物になっていました。

新しいサークル棟は、外装が白色系の2階建て鉄骨構造となっており、陸上競技場の西側に建築されました。延べ面積は、409.61㎡で、14の部屋に器具置場、共

同練習室(127.64㎡)を有する建物となっております。

この新棟の完成を祝い、去る5月26日、関係サークルの移転も完了したことから、開所式が行われました。放送設備は放送文化研究会が担当、進行は歴史学研究会が行い、舞台工房学生代表が開式の宣言を行いました。仙道学長はあいさつの中で、課外活動の

重要性を説き、課外活動施設の充実は大学の施策であると述べられました。

この後サークルを代表して汗をかく会から、旧部室は、老朽化が進み引き戸の開閉がうまくいかないほか、床が抜けかけてしまうこともあり、また露出配線のため安全面の不安もあった、今後は安心して楽しく活動ができるとお礼のことばがありました。

テープカットの後、吹奏楽団による演奏、奇術愛好会によるマジックがあり、教職員・

学生多数参加のもと開所を祝いました。

閉式の後、新棟を視察し、学生諸君から活動の様子と使用状況を伺い、今後の各サークルの活動を期待しました。



テープカット



吹奏楽団による記念演奏

山形大学東京サテライト



山形大学東京サテライト

昨年4月に、JR山手線田町駅前のキャンパス・イノベーションセンター（CIC）内にオープンした山形大学東京サテライトでは首都圏の窓口としてさまざまな活動を行っています。

産官学連携関連の情報収集は多摩地区、文京区、大田区、板橋区、港区、埼玉県等の関連機関と接触し、山形大学をアピールしています。今年4月には、サテライトを足がかりにして、企業8社と合同の共同研究が進み、〈独〉新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）への申請が実現しました。また、山形大学の首都圏での認知度を高めていきたいということで、昨年開催した工学部公開講座は好評でした。今年は8月5日に開催することになっております。

関東地区の高校訪問を積極的に行い、高校生に山形大学を紹介していくことも地道な努力と考えています。

最近では共用スペースのリエゾンコーナーで、OB会が総会・交流会を開催し、親睦を深めています。さらには首都圏企業で活躍中の卒業生等の皆様から就職・求人活動等に協力をいただいています。

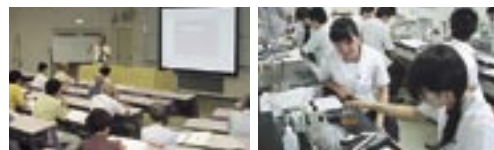
今年4月にはCICでの入居大学が29校になり、共同開催のイベントを多数企画しています。全国の生情報を交換できる場としても、有意義な活動が期待されますので、ぜひ東京サテライトまで足をお運び下さい。

平成17年度 CIC入居大学共同イベントの開催予定

1. 大学説明会 7月24日（日）
進学相談/在学生相談/入試説明/資料展示、など
2. 新技術説明会 7月29日（金）
各大学が持つ未公開特許の企業への説明会を
〈独〉科学技術振興機構（JST）と共同で開催します。
3. 就職説明会〈未定〉
4. 第2回CICフォーラム〈11月開催予定〉

〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6 CIC5階503
tel/fax : 03-5440-9071
e-mail: tokyo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp
http://www.yamagatau.ac.jp/sangaku/satellite/
html/f_satellite.html

公開講座



人文学部

1.「文学の逆襲」

日 時 7月23日（土）～8月6日（土）
14:00～17:00 毎週土曜日 計3回
場 所 山形市 人文学部201講義室
募 集 人 員 30人 一般の方・大学生・高校生
受 講 料 2,000円 大学生・高校生は無料
問い合わせ先 人文学部総務係 TEL023-628-4203

2.「いま憲法を考える」

日 時 9月3日（土）～10月1日（土）
14:00～16:00 毎週土曜日 計5回
場 所 山形市 人文学部講義室
募 集 人 員 30人 一般の方・大学生・高校生
受 講 料 2,000円 大学生・高校生は無料
問い合わせ先 人文学部総務係 TEL023-628-4203

理学部

1.「親子で体験！バイオロジー3 覗いてみよう、ミクロの世界」

日 時 8月7日（日）10:00～16:00（8月6日（土）に予定
していましたが、8月7日（日）に変更になりました。）
場 所 山形市 理学部
募 集 人 員 親子20組程度
受 講 料 無料
問い合わせ先 理学部生物学科 澤井研究室 TEL023-628-4772

2.サイエンス・サマースクール in やまがた

日 時 8月9日（火）～8月19日（金）
場 所 山形市 理学部
募 集 人 員 高校生
受 講 料 無料
問い合わせ先 理学部総務係 TEL023-628-4505

地域教育文化学部

1.「銅版画の技法と表現」

日 時 9月3日（土）～9月24日（土）
場 所 山形市 地域教育文化学部13演習室
第二アトリエ
募 集 人 員 15人 一般の方
受 講 料 未定
問い合わせ先 地域教育文化学部総務係 TEL023-628-4304

2.「生活と環境の科学シリーズI 資源のリサイクルを考え、実践する」

日 時 9月3日（土）～10月8日（土）
場 所 山形市 地域教育文化学部 実習工場
募 集 人 員 10組の親子 中学1年以上
受 講 料 3,000円
問い合わせ先 地域教育文化学部総務係 TEL023-628-4304



公開講座

工学部

1.「高分子とナノテクノロジー」

日 時 8月5日(金) 13:00~17:00
場 所 東京都港区芝浦JR田町駅(芝浦口)
キャンパスイノベーションセンター内
山形大学東京サテライト
募 集 人 員 50人 一般の方・高校生・大学生・企業研究員
受 講 料 テキスト代の実費のみ
問い合わせ先 工学部研究支援係 TEL0238-26-3004

2.「手取り足取り教えます」

日 時 9月3日(土)・9月10日(土) 13:00~16:10
場 所 米沢市 工学部
募 集 人 員 50人 一般の方
受 講 料 テキスト代の実費のみ
問い合わせ先 工学部研究支援係 TEL0238-26-3004

3.「科学の創造、芸術の発明」

日 時 10月1日(土)~10月15日(土)
13:30~17:00 毎週土曜日 計3回
場 所 米沢市 工学部
募 集 人 員 50名 一般の方
受 講 料 3,000円
問い合わせ先 附属博物館事務室 TEL023-628-4930

農学部

1. 公開シンポジウム「自然との共生をめざして
-21世紀での生き方を考える-」

日 時 平成17年9月24日(土) 14:00~17:00
場 所 鶴岡市 出羽庄内国際村
参加予定人数 約200人 一般の方
問い合わせ先 農学部庶務係 TEL0235-28-2805

2. アブラムシ・カイガラムシ生物防除国際シンポジウム

日 時 平成17年9月25日(日)~ 29日(木)
場 所 鶴岡市 出羽庄内国際村
参加予定人数 100人(外国人50人,日本人50人)
問い合わせ先 農学部庶務係 TEL0235-28-2805

大学説明会

1. オープンキャンパス・体験入学

(1) 学部説明会(対象者は高校生、場所は各キャンパス)

人文学部、地域教育文化学部、理学部 8/6(土)
医学部、8/4(木)~8/5(金)
工学部、農学部 8/5(金)

(2) 大学院説明会

社会文化システム研究科 7/30(土)

問い合わせ先：学務部入試課
電 話：023-628-4141
FAX：023-628-4144

2. 移動オープンキャンパス

『山形大学フェア in 白い森の国 おぐに』

日 時 9月17日(土) 10:00~16:30
場 所 小国町 おぐに総合開発センター、
小国町民総合体育館
どなた様でも入場可能です。
問い合わせ先 工学部企画係 TEL0238-26-3005

入学試験

- ① 医学部3年次編入学(看護学科) 9/5(月) 山形市医学部
- ② 工学部3年次編入学(Bコース) 9/3(土) 米沢市工学部
- ③ 農学部3年次編入学 7/2(土) 鶴岡市農学部
- ④ 大学院社会文化システム研究科 9/24(土) 山形市人文学部
- ⑤ 大学院教育学研究科 8/19(金) 山形市地域教育文化学部
- ⑥ 大学院理工学研究科(理学系) 博士前期課程
〈一般〉8/22(月)・8/23(火) 〈社会人〉8/23(火)
〈外国人留学生〉8/23(火) 山形市理学部
- ⑦ 大学院医学系研究科(医学専攻・生命環境医学専攻)
9/28(水) 山形市医学部
- ⑧ 大学院医学系研究科(看護学専攻) 9/1(木) 山形市医学部
- ⑨ 大学院理工学研究科(工学系) 博士前期課程
〈推薦〉7/25(月) 〈一般〉8/25(木)・8/26(金)
〈社会人〉8/25(木) 〈外国人留学生〉8/26(金)
米沢市工学部
- ⑩ 大学院理工学研究科(工学系) 博士前期課程(平成17年10月入学)
〈一般〉8/25(木)・8/26(金) 〈社会人〉8/25(木)
〈外国人留学生〉8/26(金) 米沢市工学部
- ⑪ 大学院農学研究科 9/2(金) 鶴岡市農学部
- ⑫ 大学院理工学研究科(理学系・工学系) 博士後期課程
9/26(月)(予定) 山形市理学部・米沢市工学部
- ⑬ 大学院理工学研究科(工学系) 博士後期課程(平成17年10月入学)
9/1(木)(予定) 米沢市工学部

※(予定)は、変更になる場合もあります。

問い合わせ先：学務部入試課

電 話：023-628-4141

FAX：023-628-4144

参加事業

1. 小さな科学者・体験学習会「光の不思議」

日 時 7月23日(土) 13:30~15:30
場 所 山形市 山形県産業科学館(霞城セントラル内)
募 集 人 員 20人 小学4年生~中学生(保護者同伴を歓迎します)
問い合わせ先 小さな科学者体験学習会係 TEL023-628-4561

2. わくわく化学実験ランド

日 時 7月24日(日) 午前:10:00~12:00
午後:13:30~15:30
場 所 山形市 山形県産業科学館(霞城セントラル内)
募 集 人 員 40人 午前・午後各10組の親子 小学生・中学生
問い合わせ先 山形県産業化学館 TEL023-647-0771

3. 小さな天文学者・
体験学習「望遠鏡を作って観る」

日 時 8月12日(金) 18:00~20:00
場 所 山形市 山形県産業科学館(霞城セントラル内)
募 集 人 員 40人 親子20組 小学3年生以上
問い合わせ先 NPO法人小さな天文学者の会 TEL090-6259-9456

4. 「作る・わかる・でんきの力(モーター作り)」

日 時 8月6日(土) 13:00~15:30
場 所 山形市 山形県産業科学館(霞城セントラル内)
募 集 人 員 20組 聴覚障害児と保護者
(小学生・中学生程度)
問い合わせ先 山形県産業科学館 TEL023-647-0771

山 大
博物館

山形大学附属博物館の収蔵品をはじめ、
大学が誇る貴重な資料を紹介いたします。

シリーズ ①

望遠鏡が日本に初めて入ってきたのは江戸時代の初期。軍事用として輸入され、鎖国下の日本において需要は多く、すぐに長崎などの国内でも作られるようになりました。当時は望遠鏡ではなく「遠眼鏡」と呼ばれていたようです。

江戸期に製作された遠眼鏡は木や竹で作られたものもありましたが、ほとんどは紙を張り重ねて糊付けし、その上から漆を塗って固めたもので当館所蔵のものも同様です。

遠眼鏡の段数は四段、筒をのびしながら調節して焦点を合わせてみると、7～8倍の倍率でクリアな視界を得ることができました。先端の第一筒には対物レンズ、手元側の第四筒には視野レンズが二枚はめ込まれています（双方とも押さえる金具は真鍮）。第一筒の表面の剥離が激しく昔の面影は

ありませんが、赤漆に金泥の唐草模様の凝った装飾が施され、第二筒からは杉皮を貼り木目模様になっています。

遠眼鏡の用途としては、軍事用のほかに娯楽用、測量用、商売用（船の出入りを確認する際等に使用）などいろいろありますが、だいふ使い込まれた様子のこの遠眼鏡、誰が何に使用していたものか想像してみるのも楽しいものです。

なお、附属図書館及び附属博物館は学外の方もご利用いただけるように開放しております。利用方法等は図書館カウンターでご相談下さい。

知的宝物がいろいろの附属図書館・博物館には是非お越し下さい。

とおめがね

遠眼鏡（望遠鏡）江戸期作



サイズ：筒収納時 長さ42cm（焦点を合わせた状態では113.5cm） 径6cm

編集後記 Editor's Note

EUは、1993年の発足後、共通通貨ユーロの導入、25か国に拡大などめざましい進展ぶりだ。（最近では憲章批准でちょっと異論が出ているようだが）教育分野では域内の統合的教育交流プログラムが実施されていて、その名はソクラテス計画。高等教育（エラスムス）、学校教育（コメニウス）、情報通信技術（ミネルヴァ）などの個別計画で構成され、並んで実施されている職業教育・訓練計画は、レオナルド・ダ・ヴィンチ計画。計画進捗の順調さなどが、なんといっても名前の付け方に余裕が感じられてオシャレである。ネーミングはそれ自体が力を持つからおろそかにできない。法人化された山形大学は2004-2009年を対象とする中期目標・中期計画を持っているが（HPに全文掲載）、EUに倣うとすれば、GENNAI計画とかYOUZANプロジェクトとも名付けられるのだろうか。そう考えるとMONTEDIO（出羽三山と神）というのはいいい名前で、こちらはぜひJ1昇格を期待している。（広報委員会委員長 田村幸男）

表紙のことば

「これが南極の石!?」見て触って、子どもたちも興味津々。「やってきました大学祭!」で老若男女の関心を集めてにぎわった『南極の石と氷にさわってみよう』コーナーのひとコマ。

- この「みどり樹」は下記URLからもご覧になれます。
<http://www.yamagata-u.ac.jp/html/kouhoushi.html>
- 「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。
- 「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽にお寄せください。

—— 地域に根ざし、世界を目指す ——
山形大学
Yamagata University

山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>